FROM THE IROKAWA

色川だより 12

97−12

特集 あの日 あの頃

表紙／松葉友吉

大門坂の老杉

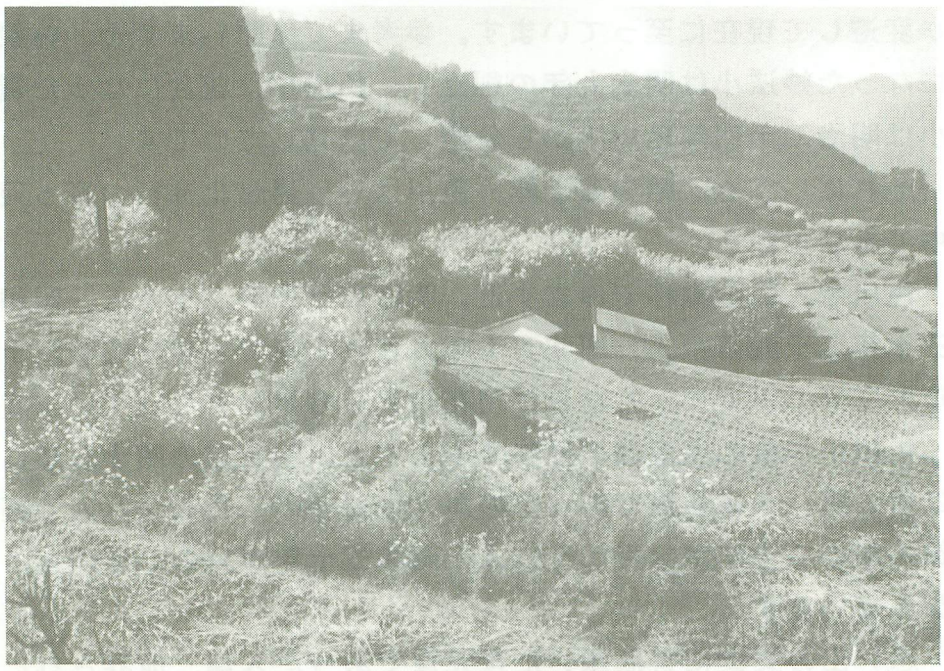
色川青年会

97.10.3

花も

１２号発行にあたって

皆様お変わりございませんか？９７年もあと少しで終わろうとしています。今年も世界中でいろいろな出来事がありました。特に日本では各界、おえら方の不祥事が明るみに出て、お日様の本、国中虫干し状態といったところでしょう。我が色川では稲や梅やふとんは干すけどそんなこともなく、今年も又１０人近くの人達が全国から引っ越して来てくれました。さらに夏にオープンした円満地公園や川での釣り客などの人で土日はにぎわい、すこしづつですが確実に昔の活気ある色川にもどりつつある様です。今回はその当時の思い出を集めてみました。冬の号は発刊まで時間が短く、各方面の方々にご迷惑をおかけしていますが、皆様のご支援のお陰で無事発送できました事、青年会一同心より感謝致しております。「色川だより」は、ご意見、ご感想等大歓迎です。只今原稿も募集中です。どんなことでも結構です。ぜひぜひご一報ください。お待ちしています。



《色川小学校百周年の思い出》

大野区　　新宅　丹信

早いもので昭和五十年色川小学校百周年記念式典を開催してから二十二年が経過しました。

記念事業の実行委員会が結成され、式典、記念講演、作品資料展、発表会、記念誌の発行等を行ったのでした。

とりわけて記念誌の発行については後世に物語る貴重な資料でありたいと編集委員一同奮起したものです。

当時、町職員である塩崎統君が色川出張所に勤務していて彼の家で連夜にわたって編集したのでした。手前味噌になりますがよくもあれだけの資料が集まったものと感心しました。

私自身は酒ばかり飲んでいた記憶を矢鱈と思い出すばかりです。

色川小学校は記念誌に詳しく記述していますが要約しますと明治八年一月十一日、大野楞厳院で創立し、その後校舎が幾度か変遷して現在に至っています。参考までに記しますと、休校になった妙法小は明治九年の創立で、色川小に統合になった篭小は明治二十四年色川小から分離して創立したのです。

それにしても、昭和五十年、色川はもう過疎化進行の真っ只中でありました。

色川全人口の推移でみますと、明治二十三年二千余人、昭和三十年二千九百余人、昭和五十年九百九十人ですから昭和三十年の三分の一です。ちなみに現在約又その半分となっています。

色川小学校の児童数の推移でみますと、明治末の四十五年に二百人弱、一番多数であったのが大正五年の二百五十八人で終戦の年の二十年が二百二十六人、昭和五十年が只の二十四人となっています。

思い出の文集に寄稿戴いた昔児童であった人達、他界された

《はじめまして》

大野区　　松村　光隆
美也子
あかね

私は、若い頃から、ずっと、「田舎で、農業でもして、のんびり暮らしたい。」と思っておりました。「農業でも」と言いますのは、農業を研究して、「自分はこんな農業をしたい。」と言う様な、確固たる信念を持っていたのではなく、ただ農業をしながら、陶芸をしたり木工をしたり、と言う様な甘い考えで、今現在、入植されて、真剣に農業をしている方達に比べて、はずかしく思っています。ただ米作りは、これから勉強して、私も真剣に取り組んで行きたいと思っています。

私たち家族は、本年八月二八日、大阪府和泉市からやってまいりました。大野の「ふるさと住宅」に、入居させていただきましたが、最初入植を反対していた家族も、この色川の暮らしが気に入り、毎日ニコニコ楽しく暮らしてくれています。色川に来て、澄んだ空気、きれいな水、やさしい人に包まれて、何か、都会で汚れた心、体が毎日洗われて行く様です。色川の人達が、都会と違って、皆やさしいのは、こんな環境が、人の心まで穏やかにするんだなあと、つくづく思いました。私が、いつも、「ギスギスした都会と違うて、毎日楽しい、夢の中にいてる様や。」といいますと、現実派の妻は、「あんたそんな事言うて、楽しいだけでは、生活して行けまへんで。」と言って、さっそく勝浦の、まんじゅう屋へ、働きに行ってくれています。私も自分が、ふがいなく、早く少しでも収入を得る様、がんばろうと、思っております。

今現在、地元の皆様に骨を折っていただき、田んぼと畑をお世話していただきました。また、炭焼きや、木工にも興味を持っ

ておりましたところ、親切にすすめてくれる方があり、「色川ゆうき工房」で、炭焼き、木工の実習も受けております。

好きな、魚つり、温泉、食べ(飲み)歩き等、遊び好きな私にとって、何かと誘惑の多い、恵まれた土地柄ですが、これに負けず、農業、木工等に専念して行きたいと思っています。私達家族は、これから色川の住人として生きて行く訳ですが、色川の自然を守り、地元の皆さんとの人間関係も大切にして、少しでも色川の為になる様、がんばって行くつもりですので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

《はじめまして》

南平野　森　倫三

北陸は富山で農家の三男坊として生まれ、育ちました。でも、子供のころの百姓仕事は、辛く、とても自分の“なりわい”と考えることはできませんでした。今のような耕運機、田植え機、稲刈り機などない時代ですから、胃が弱く、体力のないことで、とても一人前の百姓にはなれないと悩んでいました。

ですから、高校を出ると、すぐサラリーマンとして富山市まで通勤し始めました。そしてサラリーマンの世界をさまよっているうちに、大阪で定年を迎えたのですが、実は３９歳の時に大きな転機がありました。

仕事の最中に、胸が「きゅー」と締め付けられるような痛みが襲ったのです。はじめは気にならなかったのですが、日を追うごとに痛みが強くなり、ある日、仕事をそのままに、近くの病院へ駆け込み診察を受けました。「心因性冠状動脈・・・・」という聞いた事もない病名を言われ、即刻入院を宣告されました。つまり、ノイローゼだったのです。

やっぱり俺は都会での仕事は向いてないなーと、つくづく考えさせられました。初めて体験する病院という世界、いろいろ勉強しましたが、医師や看護婦や患者たちとの交流の中で、それまでほとんど関心のなかった「健康」について、大変多くの事を学びました。

退院した後も、都会生活ではなぜ多くの人が健康を害するのか（大阪は平均寿命が全国最低）の追求を始めていました。私はその点でも、いい友人に恵まれていました。「大阪から公害をなくす会」をやっている友から、「小児ぜんそく」「アトピー」に始まって、成人病などの基礎知識を得ました。堺市で学習塾をやってる友から「青汁健康法」を学びました。そして、

よつば会の牛乳を飲むようになってから「有機農業」を知りました。４５歳になっていました。その時すぐ農業を始めたかったのですが、家族の反対を説得しきれないまま、とうとう定年を迎えました。

色川に来ました。色川の皆さんのおかげで、やっと夢がかないました。人情にあふれ、水がきれいで、空気がおいしくて、いうことがありません。自分だけの幸せの事をいえば、とてもすばらしいことです。都会生活で苦しむ多くの仲間には、申し訳ないけれども。

夢はこの緑野をかけめぐってはいますが、何しろのんきな性格です。どうか、知恵と力を貸して下さい。

同級会と中学時代の思い出

速水　力三
（１９６４年３月　卒業）

私達は、この夏、新設された円満地オートキャンプ場に集いました。卒業以来３４年間で２度目、前回から１７年ぶりの同級会を開催。恩師５名、卒業生も半数程の２６名が、遠くは東京、大阪方面から駆けつけました。

台風の影響も心配された雨の中、バーベキュー、魚料理を囲んで、お酒をくみかわし思い出話に花を咲かせました。夕刻、集まってくる懐かしい顔、顔・・・「あっ！○○ちゃん！！」当時の顔がオーバーラップする瞬間でした。

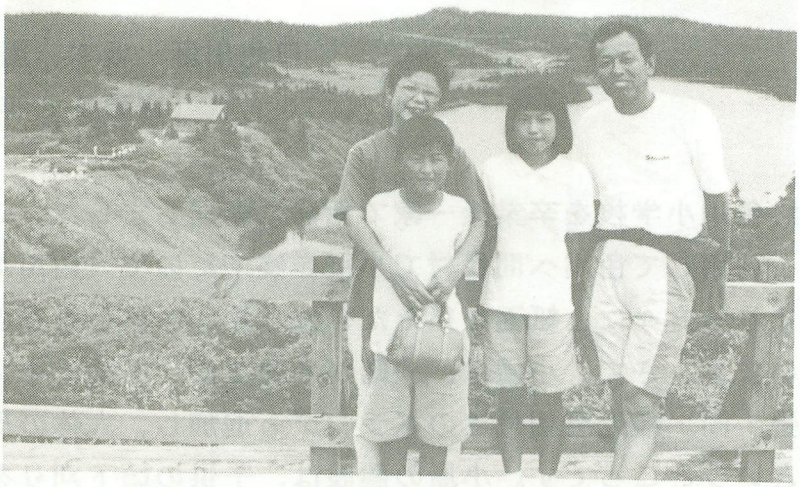
女子の多かった学年、里帰り兼ねての女性の参加もあり華やいだものとなりました。男子は仕事のこともあり、参加が少なかったのが残念でした。卒業時の拡大写真には人盛りにぎやかな話し声は山々にこだましました。

記念写真で一次会を終え、バンガローでの二次会も大いに盛り上がり、深夜まで近況、中学時代の話が次々とわき上がり、つきませんでした。「いつまでも若くないのだから、このような機会を多くしたいね。」「次回はこの輪をさらに広めよう」の元気ある言葉で結びました。

同級生との一瞬は、当時にタイムスリップさせてくれ、将来へのエネルギーを与えてくれるものでした。多くの仲間の協力で実施できた楽しい催しでした。

私は、中学校の教師をしており、新宮に住んでいます。現在郡内の学校では、生徒が大変減少しています。当時は、戦後ベビーブームの真中の学年でもあり、小坂に鉱山もあったことから、ピーク時は中学校も２００名程の生徒がいました。

父、母（助産婦）の鉱山勤務の関係で、４才頃から中２の夏まで、にぎやかな社宅生活をしました。当時の鉱山には、多く

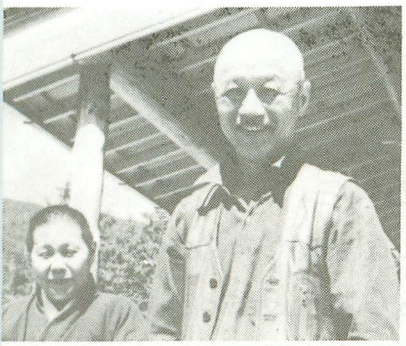


の人達が勤務しており、とても活気がありました。頭にきりりとハチマキをしめ、歌声高らかにトラックの荷台に乗った多くの労働者、那智鉱山の集会に合流したのでしょう。メーデーの小さいころの強烈な印象でした。

文化、購買等の設備も整い、小さい頃１０円でみる映画（月に２本程）は、とても楽しみでした。日本の高度経済成長期、エネルギーの石炭から石油への転換とともに鉱山は閉山へと進んでいったのです。中学２年の夏のことです。同級生たちが続々と、近くは那智から、遠くは下川（北海道）尾去沢（秋田）明延（兵庫）等の鉱山へ転校して行きました。

私は、ふる里色川に戻りました。色川から遠くに見る夜の鉱山の社宅。灯がポツポツと消え、１０月頃には完全に消えていった淋しさは、今も脳裏に鮮明に残っています。この多くの友の消息を知り、次回はさらに大きな同級会にしたいです。

色川中に初任で勤務した妻と大学１年（男）、中１（女）、小５（男）の家族です。色川と色川だよりの益々の発展を願っています。皆さん今後ともよろしくお願いします。



《はじめまして》

大野区禅定林　西村　祖融
祖心

今年の２月に阪神大震災の地、宝塚より引っ越してまいりました。頭の中で分かっていたつもりでしたが、それを震災によってはっきりと見せつけられました。生きるとは・・・・？

７年前から堀沢祖門先生の勉強会で田古良さんと縁あって色川の大野を知り、第二の人生は都会ではなく人情ときれいな緑と水、海、星、空気があるこの地に住まわせて頂く決心をしました。

以前より薬局の営業を致しておりまして、世の移り変わりと人の移り変わりを色々と考えさせられ、自分をも見つめる日々でした。今、日本広く世界を見ますと、世は混沌の中、皆、安定した精神を失い、経済戦争、それに自由という化け物に心をおどらされ、弱肉強食の世界がますます地球を滅亡に追いやっている気がします。

木と緑においては世界でも有数の資源国、日本。バランスのとれた精神を保ちつつ、農業を基本に礼儀を尊びながらこれほど温和な日々を送れる国は他にないでしょう。そんなことを考えながら日々暮らしていきたいと思います。

そして、自分には何ができるのかを考えながら仏教のお釈迦様の教えを基本にして生きようと、堀沢先生のもと開かれた道場「禅定林」を建設中です。

現代人は大変に不安が広がっていますから、人生・精神そして地球のことも考える交流の場にしたいと思っております。皆様ぜひ遊びに来て下さいね。

簡単ではありますが自己紹介と挨拶に代えさせて頂きます。

末筆ながら皆様の健康と発展を心よりお祈り致します。これから御指導をよろしくお願いいたします。

盆踊りのこと
（宮本敏夫さんの話から）

今年の盆踊りは、雨天のため残念ながら中止になりましたので、せめてこの紙面を舞台にしてにでも踊ってもらおうと思ったのは過日、宮本敏夫さん（口色川在住79才）に四方山話をおうかがいしていた時でした。

ひと昔前の盆踊りといえば夕刻から夜明けまで踊りあかしたそうです。それも今日のディスコとちがって、同じ音頭の同じ踊りを円くつらなって踊り続けたといいますから、娯楽というよりも宗教的な芸能に近い雰囲気のものだったのでしょう。なにしろ村中あげてのお祭りですから、その日ばかりはうら若き女性が朝帰りしたとて無礼講、「はしたない」と叱られることもなく、毎日のきびしい農作業や家事に追われていた娘さんたちにとっては盆踊りの日が来るのが楽しみで楽しみで日々のしんぼうができたといいます。まるでリオのカーニバルを連想させてくれます。リオの踊り子たちは一年中かかってコツコツと貯めたお金をその日にすべて使いきるそうです。一年の特定な日に限って、たまりにたまったものを放出させる、そのことによって日常の不満を堪え忍んでいけるという人間社会の仕組みは古今東西変わりはないようです。

試みに百科事典の「盆踊り」のページを開いてみれば、「盆踊りはわが国における農村娯楽の代表的なもので、若い男女にとっては「つまもとめ」の機会となっていた。」とあります。そこで思いついて、万葉の時代に行なわれていたという「歌垣（うたがき）」という行事について事典をひいてみると、「春秋二回、男女が集まり飲食をともにし、交接を契る古代の民衆行事。歌垣のおこなわれていた時期が播種と収穫の季節であることから、穀物の豊穣を祈る祭礼であり、農業的呪術であった。」と記されてあります。季節のちがいを別にすれば、内容的にはほとんど同じであったのではないでしょうか？

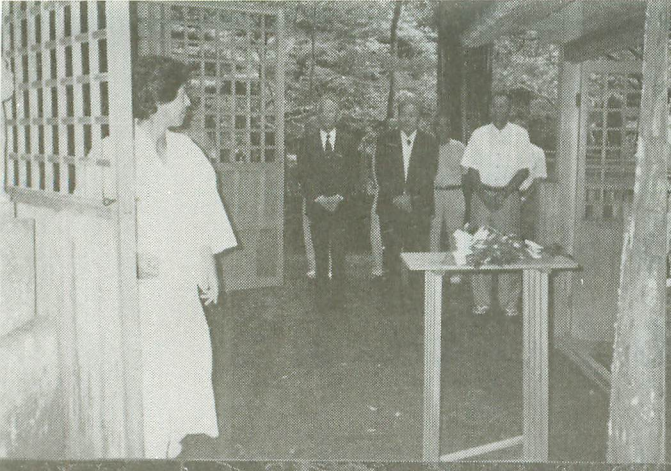
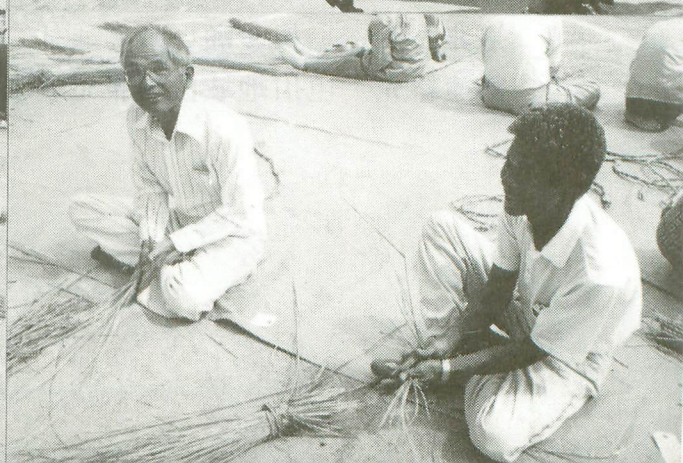
その日ばかりは「山の神が昔から禁(と)めない行事だから今日だけは大目にみる（万葉集）」という日常道徳を超えた日であったそうです。※

今では盆踊りも他の娯楽に圧倒されてか、あるいは農村の共同体意識が薄れてしまったか、昔日のおもかげはなく、オールナイトどころか9時のチャイムが鳴るや早々ときりあげるしまつ。味気なくなったのは盆踊りだけでしょうか？

宮本さんのお話は四方八方に及びとてもここに詳(つまび)らかにできませんが、終り頃になって、「昔の方が暮らしが良かった。」としみじみと語られました。昔はつらかったけれど今は生活が楽になったメデタシメデタシというわけにはいかず、「昔の方がよかった。」という宮本さんの言葉がやけにしみじみと染みこんできました。

※　歌垣という風習は中国西南部から西日本にかけて共通する求婚の習俗ですが、他にも「弓祭」という共通習俗があって、これは本来、新年から春にかけて共同狩猟を行ない、その年の焼畑の豊作を占う慣行であり、神社の社前で弓を射る「御弓」はそのなごりであるそうです。色川にはつい最近までアジアの古い風習が生きていたのでしょう。

大野区お弓祭り



今年も元気でやってます。